

## 平成30年度教育戦略推進プロジェクト支援事業について

著者	武井 隆道
雑誌名	外国語教育論集
号	41
ページ	95-96
発行年	2019-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00155080">http://hdl.handle.net/2241/00155080</a>

## 平成 30 年度教育戦略推進プロジェクト支援事業について

武井隆道

- 本年度の教育戦略推進プロジェクトに CEGLOC は、取組課題名「外国語科目の統一的成績評価基準の確立と筑波言語ディプロマの創設」として応募し、申請額 200 万円に対して 140 万円が交付された。
- 次のような内容が当初の計画である。
- 外国語の外部諸検定をもとに、本学における統一的な成績認定基準を策定し、さらに学生の言語能力を証明する「筑波言語ディプロマ」を創設する。これには TOEFL を初めとする英語検定、ゲーテ・インスティトゥート検定や DELF などヨーロッパ諸言語の検定を含み、留学生の場合日本語能力証明を加える。また留学経験や外国語を使った社会活動も評価し、今年度は最初の事例としてオリンピックに訪れる観光客のための通訳ボランティアを記載対象とする。これらを記述した証明書を必要に応じて随時交付すると同時に、卒業時には希望者全員に交付する。複数の言語能力を並行して証明するものであり、卒業後も一生涯にわたって示すことのできる個人言語能力ポートフォリオとして機能する。そのための基盤研究として、諸検定間の相互比較を行い、認定レベルの互換性の確保を目指す。
- 目的は、本学の外国語科目成績認定基準を、さまざまな検定を参考に策定することである。
- 本学の中期目標には大括り入試、学位プログラム化が盛り込まれて、外国語科目の統一的な成績基準を設ける必要が生じている。そのために英語における TOEFL 等の検定の成績と、ドイツ語（ゲーテ・インスティトゥート検定）やフランス語（DELF）における CEFR 基準による成績、さらに国内団体実施の英検や独検、仏検等の基準を参考に、本学独自の基準を作りたい。
- また近く導入される大学入試センター試験に替わる新入試では外国語科目をこれらの検定によって代替することが認められることから、検定成績の本学側の評価基準を確立する必要がある。
- 本プロジェクトは、こうした必要性から、合理的な根拠に基づいて外国語の成績を認定するための基盤整備を行うものである。
- 最近各種外国語検定試験に本学学生諸君が積極的に取り組んでいる傾向が見られ、CEGLOC 関係者としてはうれしい限りであるが、さらに学生諸君のモチベーションを高めるために、筑波言語ディプロマを創設する。これには日本人学生の場合 CEGLOC 提供外国語科目の成績、外部検定の成績、留学履歴、社会活動等を記載するものである。
- さらに本学への留学生には、上記項目のほか日本語検定も記載したディプロマ

を交付する。本学生のゲーテ検定受検者に留学生が多いことから、留学生へのディプロマは需要と意義があると認められる。これによって本学が、いずれ東アジアにおける外国語習得のハブ大学として知られるようになることが、筆者の望みである。

- 今年度は、オリンピック通訳ボランティア活動を CEGLOC 主体で組織し、ディプロマ記載のモデルケースとする。
- 英語の TOEFL ならびに TOEIC は、それぞれ独自の基準により、満点から零点までの直線的スケールで能力を認定するアチーブメントテストの性格が強いのに対し、ゲーテ・インスティトゥート検定や DELF フランス語検定などヨーロッパ諸国の検定は CEFR（ヨーロッパ共通参照枠）に基づき、いわゆる Can-Do-Description（その表現によってどのような行為が遂行できるか）による共通基準となっており、プロフィシェンシー・テストの傾向をもつ。この両者の比較可能性を確保することは、本学外国語教育にとって不可欠である。
- また日本国内の団体による独検や仏検は、日本の大学における授業実態に即した内容となっており、これと CEFR 基準との比較は、国内検定実施団体もとり組み始めている（たとえば独検の実施団体ドイツ語学文学振興会とゲーテ・インスティトゥートとが、相互比較資料とするためのアンカーテストを共同で実施する計画がある）。
- 筑波言語ディプロマのような複数言語能力証明は、EU の政策として提唱されている仮想ポートフォリオ構想（複数の言語能力証明書をヴァーチャルなパイプダーに綴じて一生携行すること）に対応するものである。
- なお、この予算内から昨年度と同じく、諸検定受験料の補助を行い、またトライリンガルデーを開催する予定である。